

事業拡大し、インドへ進出



インドへ日本酒を輸出。在インド日本国大使館主催のイベントで紹介する

会社設立30年。酒米を扱う専門商社としてスタート。主食用米、自社商品開発と事業を拡大、さらにインドでの県産米の生産・販売、日本酒を含む日本食材の輸出と事業の幅は米販売にとどまらない。46歳で創業し地域社会や消費者により良いサービスを提供し続けている河合克行(株)アスク代表取締役は、インド進出の経緯、会社設立の思い、これからの抱負、50周年を迎える民俗文化サークル四方山会のことなど語ってもらった。



ANAの機内食にも採用された「谷藤米」



米作りの現地で地元の子供たちを招いて交流会を開催

(株)アスク (屋号たわら蔵)

代表取締役 河合克行
〒990-2338
山形市蔵王松ヶ丘2丁目1-36
(山形市蔵王産業団地内)
☎023-695-4111



2014年に試験栽培を開始。元山形県農業試験場長谷藤雄二氏の指導を受けて本格生産。栽培面積は350畝、1千ト超生産。現地子会社アスクインディアは最新鋭の精米設備を導入、1千畝を目指す＝インド北部ハリヤーナ州カイサル

インドで米の試験栽培を開始したのは2014年でした。現地で日本食レストランを経営している方から「和食に最適な日本の米を持つてきてくれないか」と依頼されたのがきっかけです。ところが、農業大国でもあるインドは食品の輸入規制が非常に厳しい。それではと現地での栽培を決断しました。18年に現地子会社アスクインディア（ニューデ

リー、代表取締役・河合龍太(株)アスク常務)を設立し、本県の主力品種「はえぬき」を開発した元県農業試験場長の谷藤雄二氏を技術顧問に迎え、インド北部ハリヤーナ州カイサルで、気候、土壌、水の確保など様々な問題をクリアしながら現地の人たちと一緒に汗水流しながら米作りに励んでいます。10年たった今、栽培面積は350畝、生産量は1千ト超に達しています。

インドの和食市場は急速に成長し、特に都市部では日本食レストランや居酒屋が増えています。谷藤氏の名前をいただいて「谷藤米」として販売していますが、品質の良さが評判となつて販売量は順調に伸び、現在短粒米を使用しているレストランの半数の約650店に納めています。ANAのインド総代表兼デリー支店長(当時)片桐常弥氏が天童市出身という地縁を得て、ANAのインド発日本直行便の機内食に採用さ

れたことも追い風になりました。昨年7月、インドへ日本酒をコンテナ輸出しました。全国で初めてのことです。インド全土に酒の販売店を持つ大手ウイスキーメーカーのADS社とパートナー契約を締結し、私どもの会社が酒米を提供している出羽桜酒造(天童市)、六歌仙(東根市)、寿虎屋酒造(山形市)、千代寿酒造(寒河江市)、小嶋総本店(米沢市)、東の麓酒造(南陽市)、柏露酒造(新潟県長岡市)など7つの蔵の23銘柄9434本を輸出しました。

日本酒をたしなむ食文化は根付いていません。まずはADS社が本拠とするハリヤーナ州を起点に需要を掘り起こすとともに、インド最大の食品見本市や日本大使館主催のイベントに出展。さらに、山形県の支援を得て「あっぱれニッポン！」と題した県産日本酒普及啓発ビデオを制作しました。日本の「お酒文化」と「お祭り」をテーマに、日本酒を楽しむ現地の人たちのパフォーマンスを県内各地の風景とともに楽曲に乗せて披露しています。

インド進出の原点は30年前に遡ります。1995年8月7日、山形市飯塚町の一室を電気代、水道料金込み家賃3万円で会社を立ち上げまし



日本酒を広めようプロジェクト「あっぱれニッポン！」のワンシーン



今年創立50周年を迎える民俗文化サークル四方山会の庄巻のパフォーマンス

た。8月7日は山形花笠まつりの最終日。民俗文化サークル四方山会を大学卒業の年に立ち上げ、参加している花笠まつりの熱気に背中を押してもらいたいという思いでした。文字通り裸一貫。23年間勤めていた会社で酒米を扱っていた経験と「お前が居なくなると困る」という酒蔵、大手商社の信頼が頼りでした。

第1期売上10億円（経常利益1千万円）、第2期同15億円（同1500万円）、第3期同20億円（同2千万

円）と事業計画を立て、山田錦など各地の優良酒米を仕入れて、酒造メーカー（蔵元）に販売。事業計画を上回る数字を残しました。その間、全国各地の酒造組合や大手商社が企画した講演会に講師として呼ばれ、望ましい酒造好適米について、香り豊かな日本酒を醸す条件について、自社の取り組みについて語り、翌日は講演会に出席した蔵元をできるだけ限り訪問しました。振り返ってみれば、1期目は今にも切れそうな

木綿糸の上を、2期目はロープの上を、3期目になってようやく平均台の上を渡って歩いたような日々でした。こうして独自に築いたネットワークが基礎となり、会社設立当時は思いもよらなかったインド進出実現に至ったのです。

今後の目標の一つはインド市場で米や日本酒を含む日本産加工食品、水産（加工）品の販売拡大と、本県エリアをはじめ企業のインド進出のサポートです。これまでの経験を踏まえてビジネス戦略の策定、現地企業の選定と交渉支援、輸出入手続き、各種規制に関するアドバイス、販売チャンネルの構築、物流ネットワーク設計など包括的なサービスを通じて円滑な進出、運営をアシスクイディアと連携しお手伝いしたいと考えています。これまでに日本の大手食品、アルコールの各メーカーと販売促進の業務提携を結んでいるほか、数多くの企業からインド進出支援業務委託を受注。また、JETROから、ALPS処理水の海洋放出で輸用量が大幅に減ったホタテ、ハマチを広める動画作成など委託されました。

もう一つの目標は、安心安全な良質米の提供です。米には、それぞれの品種の数だけ美味しさが、生産地の数だけ豊かな風味が、作り手の数だけ思い入れがあり情熱が込められ

ています。一方で、米価が歴史的な高騰で備蓄米が放出されたように、半世紀にわたって続けた減反は米農家の生産性向上の意欲をそいでいます。品質の高い米を提供するともに、環境に配慮した生産プロセスを導入した農業法人の設立を検討し、農業の活性化に貢献したいと思っています。

私が主宰する民俗文化サークル四方山会は今年創立50周年を迎えます。多くの仲間と一緒に山形花笠まつりや、みちのく阿波踊り、山形市初市での餅つき踊りなど、お祭り一筋に50年の月日を歩んでまいりました。縦割り社会の現代社会の中にあつて祭りの世界は、誰もが同じ目の高さで物事を考え、皆で課題を解決できる広場です。それはまた、当社の経営決断と業務遂行の基本でもあります。

6月28日、山形市民会館で50年の足跡を「50周年記念公演」という舞台で、皆様へご披露することに致しました。祭りは民俗文化が集約され、民衆が長い間培った素直な感情の集大成でもあります。祭りを傳承していくことは、次の世代に多くの活きた智恵を授けることにもなるでしょう。多くの皆様より、私たちの趣意にご賛同いただきご協力をお願い致します。